

## 研究

## 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析

村上 京子<sup>1)</sup>, 飯野 英親<sup>1)</sup>  
塚原 正人<sup>2)</sup>, 辻野久美子<sup>1)</sup>

## 〔論文要旨〕

乳幼児を持つ母親に、育児ストレスの現状と育児状況との関係を明らかにすることを目的として質問紙調査を行った。育児ストレス構造には、母親、子ども、夫を含めた育児サポート・環境、および周囲との調整に関連した7因子が挙げられた。育児ストレスの実態として、夫の育児協力、育児に対する捉え方、周囲との調整など、自分の身近な問題に関する因子の育児ストレスは低かったが、子どもの遊ぶ場所、就労などの社会的環境、子どもに対するコントロール不可能感などの要因ではストレスが高かった。育児状況との関連では、母親の年齢が高くなるにつれ育児ストレスが高く、体力的問題も抱えていた。また、母親のアイデンティティに関する要因では職業と関連し、専業主婦の育児ストレスが高かった。今後は、母親のニーズにさらに合わせた育児支援制度や、公園など遊び場等の育児環境の整備が望まれる。

**Key words :** 育児ストレス, 育児不安, 母親, 乳幼児

## I. はじめに

核家族化や地域社会のサポート機能の低下により、家庭における母親の負担が増大している。母親は子どもを生きがいに感じる一方、育児に対する困難感やいらだちを感じることが多い。育児不安は、「子の現実や将来、あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」<sup>1)</sup>であり、一般に見られるが、「育児による疲労感や気力の低下、イライラ、不安、悩み等が解消されず蓄積されたままになっている状態」<sup>2)</sup>が続くと、育児ノイローゼや虐待につながる恐れがある。

これまで育児不安や育児ストレスに関する研究では、子どもの年齢、発達、性格・気質など子どもに関すること<sup>3)4)</sup>、母親のパーソナリティや育児に対する捉え方など母親に関すること<sup>5)</sup>、夫・その他の育児サポートなどの社会的

要因<sup>6)7)</sup>といった側面から研究が進められてきた。また、育児に限らず家事や生活全体から生じる疲労として捉えた研究がある<sup>6)8)</sup>。近年では、育児ストレスを多面的に捉えようと育児ストレス尺度の開発・使用が試みられ<sup>9)~15)</sup>、ラザルスの心理的ストレスモデル<sup>16)</sup>を用いた研究がいくつか行われている<sup>9)14)15)</sup>。これらの研究結果より、育児不安や育児ストレスを生じる要因は親のパーソナリティ<sup>1)5)</sup>やソーシャルサポート<sup>1)6)7)17)</sup>、子どもの気質<sup>5)10)13)</sup>などいくつか挙がってきているが、その実態を明らかにしたものは少ない。本研究では、乳幼児を持つ母親の育児ストレスの現状と育児状況との関係を明らかにすることを目的に調査を行った。これにより、少子化社会における母親の現状を理解し、母親の不安を軽減するための示唆となることが期待される。

Analysis on the Factor of Child Care Stress

Kyoko MURAKAMI, Hidechika INO, Masato TSUKAHARA, Kumiko TSUJINO

1) 山口大学医学部保健学科 (看護師/研究職) 2) 山口大学医学部保健学科 (医師/研究職)

別刷請求先: 村上京子 山口大学医学部保健学科 〒755-8505 山口県宇部市南小串1-1-1

Tel/Fax : 0836-22-2820

[1658]

受付 04. 9. 16

採用 05. 4. 7

## II. 調査方法

### 1. 対象と手続き

対象は平成14年8月～10月に、山口県U保健センターの1歳6か月、3歳児健診に来所した母親である。調査の主旨を紙面で説明し、同意が得られた母親に質問紙を手渡した。健診の待ち時間に無記名で回答してもらい回収箱を設置した。この方法で195部を配付・回収した。これらの結果、質問項目の95%以上を回答した184名(94.4%)を分析対象とした。

### 2. 調査内容

調査内容には、母親の年齢、就労状況、家族形態、子どもの人数、末子の年齢など、育児状況を尋ねる項目を含めた。清水らは自由記述をもとに評定尺度を作成して母親の育児ストレスを分析し、子ども・母親・社会的要因に関する8因子を挙げている<sup>15)</sup>。これを基に、他の育児に関する研究<sup>13)17)</sup>を参考に研究者らが修正を加えて60項目を作成した。また、育児不安を測定するにはポジティブな項目を採用することが薦められており<sup>18)</sup>、「子育ては大変だが楽しいと思える」など育児の肯定感を尋ねる4項目を含めた。回答は項目に対し「そう思う」(1点)から「そう思わない」(4点)までの4段階評点で、得点が低いほど育児ストレスが高くなることを意味する。各項目に対し「そう思う」、「ややそう思う」と答えた者を高ストレス群、「ややそう思わない」、「そう思わない」と答えた者を低ストレス群とした。育児肯定感を尋ねる4項目は逆転項目として得点修正して集計した。また、無回答項目は欠損値とし、集計から除外した。

### 3. 分析

因子分析(主因子法、固有値1.5以上の値についてプロマックス回転)を行い、因子構造を確認した。各因子の内容一貫性を検討するためにCronbach's  $\alpha$ 係数を算出した。各因子項目の合計得点を「尺度得点」とし、尺度得点の平均値と標準偏差を算出し、母親の年齢、就労状況、子どもの人数、末子の年齢、子どもの持病の有無との関連について重回帰分析を行った。

分析にはSPSS Ver.10.1を使用した。

## III. 結果

対象の母親は20代66名(35.9%)、30代109名(59.2%)が多く、就労状況は無職(専業主婦)124名(67.4%)、常勤25名(13.6%)、パートタイム25名(13.6%)、自営業9名(4.9%)だった。子どもの数は平均1.96人(1～5人)で最頻値は2人だった。家族形態は核家族が154名(83.7%)と多かった(表1)。

表1 母親の基本的特性 (n=184)

属性	人 (%)
母親の年齢	
20代(20～29歳)	66(35.9)
30代(30～39歳)	109(59.2)
40代(40～49歳)	9(4.9)
母親の就労状況	
無職(専業主婦)	124(67.4)
常勤(産休・育児休暇中を含む)	25(13.6)
パートタイム	25(13.6)
自営業	9(4.9)
無回答	1(0.5)
子どもの人数	
1人	56(30.4)
2人	81(44.0)
3人以上	43(23.4)
無回答	4(2.2)
末子の年齢	
0歳	13(7.1)
1～2歳	101(54.8)
3歳以上	66(35.9)
不明	4(2.2)
子どもの持病	
なし	159(86.4)
あり	19(10.3)
(アトピー性皮膚炎4, 喘息4, 中耳炎3, アレルギー性鼻炎2, 心室中核欠損1, アンジェルマン症候群1, 川崎病1, ネフローゼ症候群1, 不明1)	
無回答	6(3.3)
家族形態	
夫婦と子ども	154(83.7)
直系および複合家族	23(12.5)
母子のみ(親と同居を含む)	5(2.7)
無回答	2(1.1)

1. 育児ストレス尺度の検討

因子分析の結果, 固有値1.5以上, 絶対値0.4

以上の因子負荷量でかつ2因子にまたがって0.4以上の負荷を示さない50項目10因子が抽出

表2 乳幼児を持つ母親の育児ストレス因子負荷量

質 問 項 目	因子負荷量						
	1	2	3	4	5	6	7
第1因子 「夫の育児態度に対する不満」(7項目, $\alpha=0.87$ )							
・夫は子育てに協力的でない	0.881	-0.092	0.049	0.105	-0.139	0.019	-0.024
・夫が私の育児生活の苦勞を理解してくれない	0.803	0.062	-0.053	0.013	-0.040	-0.019	-0.047
・夫は子どもよりも自分の生活を中心に考えている	0.720	-0.138	0.066	0.090	-0.058	0.107	0.066
・夫は家事に協力的でない	0.719	-0.100	0.052	0.004	-0.051	0.032	-0.048
・夫と子育ての教育方針において食い違いがある	0.658	0.165	-0.146	-0.109	0.292	-0.196	-0.070
・夫の子育ては不完全で, かねて迷惑なことをする	0.600	0.180	0.016	-0.119	0.179	-0.022	0.095
・夫は子どもが好きではない	0.582	0.003	-0.022	0.107	-0.015	-0.099	-0.009
第2因子 「育児の理想と現実に対する不安」(8項目, $\alpha=0.79$ )							
・育児に手を抜いたり, 問題から逃げようとする自分を責めることがある	0.064	0.815	-0.116	-0.038	-0.135	0.154	-0.064
・他の子と喧嘩をしたり, 怪我をさせたりしないか心配だ	0.093	0.686	0.053	-0.125	-0.058	-0.150	0.123
・完全な子育てをすべきだというプレッシャーを感じる	0.007	0.663	0.078	0.061	0.070	0.011	-0.085
・いつまで自分の言うことを聞いてくれるかが気がかりだ	-0.014	0.656	-0.031	0.099	-0.113	-0.128	0.201
・子どもの悪い面を自分のせいだと思う	-0.077	0.610	0.003	-0.063	-0.147	-0.054	0.022
・育児について期待と現実との間にギャップを感じてしまうことが多い	-0.053	0.541	0.127	-0.015	0.130	0.017	-0.019
・育児に関する情報が多くて混乱することがある	-0.178	0.519	0.078	0.231	0.084	0.075	-0.113
・家事・育児で夫をわずらわせて悪い	-0.068	0.425	0.067	0.004	0.058	0.077	-0.119
第3因子 「子どもの発達に対する懸念」(8項目, $\alpha=0.84$ )							
・子どもの知的能力に気がかりがある	0.014	-0.010	0.867	0.001	-0.079	0.073	0.029
・同じ年頃の子どもよりわが子が劣っているのではと不安に思う	-0.006	-0.094	0.792	0.004	-0.022	0.203	-0.015
・子どもの運動能力に気がかりがある	0.018	0.045	0.706	0.026	0.079	0.024	0.034
・子どものことばの発達に気がかりがある	-0.005	-0.163	0.696	0.011	0.020	0.115	0.069
・子どもの顔つきや容姿容貌に気がかりがある	0.063	0.129	0.623	0.050	-0.140	-0.153	-0.120
・子どもの性格に気がかりがある	0.070	0.138	0.443	-0.234	0.198	-0.027	0.150
・子どもの体質・好き嫌いに気がかりがある	-0.002	0.300	0.440	-0.085	0.028	-0.274	-0.093
・食事, 排泄, 着替えなどをしつけるがなかなか身につかない	-0.020	0.101	0.404	-0.017	-0.151	0.094	0.022
第4因子 「体調と周囲との調整困難」(6項目, $\alpha=0.78$ )							
・育児のために身体の疲れや睡眠不足がある	-0.002	0	-0.037	0.741	-0.116	0.116	0.023
・疲れていても抱っこやおんぶをしてやらねばならないことが多い	0.106	-0.019	0.005	0.664	-0.082	-0.071	0.065
・周囲(父母, 友人, 近所の人など)に子育てに関して相談できる人がいない	-0.032	-0.007	0.019	0.620	0.237	-0.099	-0.031
・周囲(父母, 友人, 近所の人など)に子育てを手伝ってくれる人がいない	-0.018	-0.056	-0.016	0.574	0.286	-0.028	-0.096
・家事や仕事と育児とのバランスがうまくとれない	0.123	0.275	-0.003	0.545	-0.021	-0.120	0.042
・子どもの世話で自分の自由がきかない	0.141	0.145	-0.069	0.406	-0.039	0.190	0.056
第5因子 「育児環境の不備に対する不満」(4項目, $\alpha=0.70$ )							
・子どもが自由に遊べる場所(公園など)がない	-0.055	-0.121	-0.119	0.039	0.840	0.019	0.173
・必要ときに子どもを預かってくれる場所(保育所・託児所など)がない	0.023	-0.153	-0.039	0.018	0.602	0.220	0.050
・教育環境が不備で子どものゆく末に不安をもつ	0.167	-0.011	0.115	-0.107	0.497	0.141	-0.071
・今後, 子育てにあてられる家計が不足しそうで不安だ	0.028	0.250	-0.132	-0.112	0.447	0.126	0.041
第6因子 「アイデンティティの喪失に対する脅威」(4項目, $\alpha=0.77$ )							
・子育てに専念し, 社会から取り残された気持ちになる	-0.006	-0.070	0.073	-0.051	0.105	0.937	-0.041
・子育てに余裕ができる頃に就労できるかが不安だ	-0.073	-0.070	0.074	-0.043	0.107	0.601	0.020
・夫や周囲の人に子どもの母親としてしか見てもらえないのが辛い	0.086	0.340	-0.086	0.062	0.006	0.516	0.051
・子育ては毎日同じことの繰り返しで息がつかまる	0.061	0.358	0.012	-0.011	-0.116	0.415	-0.035
第7因子 「子どもに対するコントロール不可能感」(3項目, $\alpha=0.80$ )							
・言い聞かせても子どもがわかってくれない, 黙々をこねられて困ってしまう	0.028	-0.012	0.046	-0.037	0.272	0	0.798
・子どもの機嫌が悪くなるかと困ってしまう	-0.034	0.050	-0.014	0.215	-0.033	-0.101	0.786
・暴れて動き回ったり, いたずらされると困ってしまう	-0.090	0.015	-0.014	-0.13	0.055	0.108	0.643

された。

第1因子は夫の育児・家事への協力や理解、教育方針の違いなどから生じるストレスが示され『夫の育児態度に対する不満』とした( $\alpha=0.87$ )。次に、第2因子は「育児に手を抜いたり、問題から逃げようとする自分を責めることがある」、「完全な子育てをすべきだというプレッシャーを感じる」などの項目から『育児の理想と現実に対する不安』と解釈した( $\alpha=0.79$ )。第3因子は子どもの知的・運動能力や容姿・性格などに対する『子どもの発達に対する懸念』とした( $\alpha=0.84$ )。第4因子は「育児のために身体の疲れや睡眠不足がある」など清水ら<sup>15)</sup>の第8因子『体力や体調の不良』と類似しているが、「家事や仕事と育児のバランスがうまく取れない」など、自分の体調と周囲の状況を考えながら調整を行っていることから『体調と周囲との調整困難』とした( $\alpha=0.78$ )。また、第5因子は子どもの遊び場や預かってくれる場所の不備、家計の不足など『育児環境の不備に対する不満』が示された( $\alpha=0.70$ )。第6因子は社会から孤立した気持ちや将来の就労に対する不安などから『アイデンティティの喪失に対する脅威』とした( $\alpha=0.77$ )。第7因子は「言い聞かせてもわかってくれない」、「機嫌が悪くなると困ってしまう」など、子どもが母親の手

に負えない状態になることに対するストレスが示され、『子どもに対するコントロール不可能感』とした( $\alpha=0.80$ )。さらに、第8因子は『育児に対する肯定感』が示され( $\alpha=0.46$ )、第9因子はきちんと食事をとらないこと、夜泣き、子どもの病気や異常などに対する不安などから『子どもの問題行動に対する不安』とした( $\alpha=0.52$ )。第10因子は、子どもを預けることへの後ろめたさや不安など『子どもを預けることに対する不安』と特徴づけられた( $\alpha=0.59$ )。これらのうち、固有値の高い順に第7因子までは各因子の内部一貫性を示すCronbach's  $\alpha$ 係数が高かった。そこで、 $\alpha$ 係数が0.7以下の3因子を除く7因子40項目を以後の分析に用いることにした(表2)。

## 2. 育児ストレスの現状と育児状況との関係

育児ストレス7因子40項目の総得点(160点満点)は、最小値83, 最大値154, 平均値121.0だった( $SD=16.02$ )。また、各因子の尺度得点を図1に示した。第1因子『夫の育児態度に対する不満』、第2因子『育児の理想と現実に対する不安』、第3因子『子どもの発達に対する懸念』尺度の平均得点は高く、育児ストレスは低かった。第4因子『体調と周囲との調整困難』をみると、平均得点は17.3点(総点24,

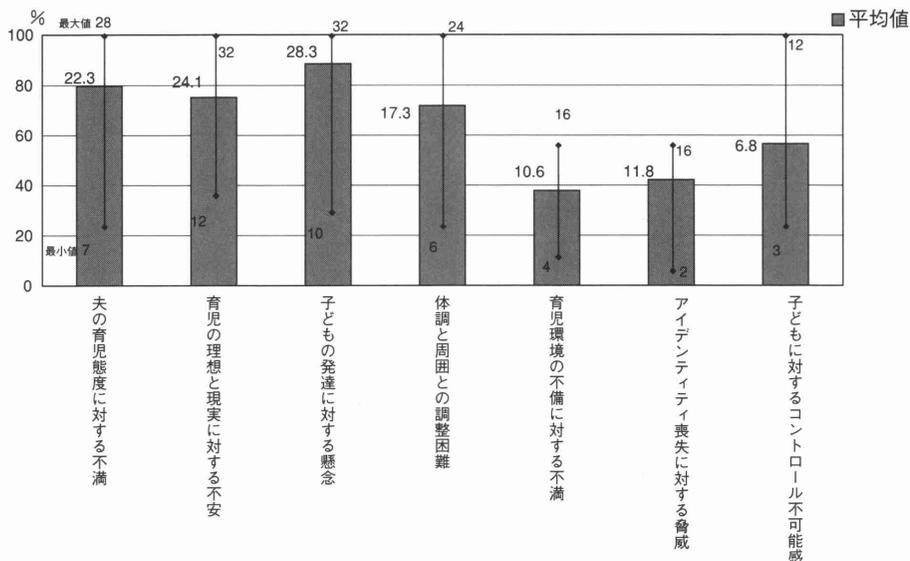


図1 育児ストレス尺度得点(総得点に占める割合)

SD=3.86)と高かった。「周囲に相談できる人がいない」、「手伝ってくれる人がいない」という項目に、「そう思う」、「ややそう思う」と回答した高ストレス群はそれぞれ28名(15.2%)、34名(18.5%)と少なかった。しかし、「育児のために身体の疲れや睡眠不足がある」、「子どもの世話で自分の自由がきかない」の項目では、高ストレス群がそれぞれ114名(62.0%)、118名(64.1%)と多かった。一方、第5因子『育児環境の不備に対する不満』尺度の平均得点は10.6点(総点28, SD=3.20)と低く、育児ストレスが高かった。特に、「今後、子育てにあってられる家計が不足しそうで不安だ」の項目では106名(57.6%)、「子どもが自由に遊べる場所(公園など)がない」では100名(54.3%)が高ストレス群だった。次に、第6因子『アイデンティティの喪失に対する脅威』尺度の平均得点は11.8点(総点28, SD=3.15)と低く、特に「子育てに余裕ができる頃に就労できるかが不安だ」の項目で高ストレス群が93名(50.5%)あった。また、第7因子『子どもに対するコントロール不可能感』尺度の平均得点は6.8点(総点12, SD=2.23)であり、「暴れて動き回ったり、いたずらされると困ってしまう」、「言い聞かせても子どもがわかってくれない、駄々をこねられて困ってしまう」、「子どもの機嫌が悪くなると困ってしまう」の項目で、高ストレス群がそれぞれ134名(72.8%)、125名(67.9%)、107名(58.2%)と多かった。

尺度得点と育児状況との関連について分析した結果、第2因子『育児の理想と現実に対する不安』、第4因子『体調と周囲との調整困難』では母親の年齢との関連がみられた(それぞれ $p < 0.05$ )。「育児の理想と現実に対する不安」では、30代の母親の方が20代、40代の母親よりも低く、「体調と周囲との調整困難」では年齢が高い母親に育児ストレスが高くなっていた。また、第3因子『子どもの発達に対する懸念』では子どもの人数が関連し、子どもの人数が多い母親は育児ストレスが低かった( $p < 0.05$ )。さらに、第6因子『アイデンティティ喪失に対する脅威』では職業と関連があり、専業主婦の方が育児ストレスが高かった( $p < 0.01$ )。

### 3. 育児に対する肯定感

「育児によって自分も成長している」、「子育ては大変だけど楽しいと思える」などの項目で、低ストレス群はそれぞれ165名(89.7%)、163名(88.6%)と多く、ほとんどの母親が育児を肯定的に捉えていた。一方、高ストレス群の母親が1割程度に認められた。

## IV. 考 察

育児ストレスを特徴づける要因として、『育児の理想と現実に対する不安』、『アイデンティティの喪失に対する脅威』などの因子に見られる母親自身のパーソナリティから生じるストレスがあった。次に、『子どもの発達に対する懸念』、『子どもに対するコントロール不可能感』など、育児の対象である子どもから生じるストレスがあった。また、『夫の育児態度に対する不満』、『育児環境の不備に対する不満』など育児をサポートする夫や環境に対する不満から生じるストレスがあった。さらに、母親が育児を遂行しようとする際の調整をする際に生じるストレスとして『体調と周囲との調整困難』があった。7つの因子のうち、5つの因子(第1・3・5・6・7因子)は清水らと同様の因子が抽出され、先行研究と共通する因子で構成されていた<sup>13)14)</sup>。

育児ストレスの現状では、『夫の育児態度に対する不満』、『育児の理想と現実に対する不安』、『子どもの発達に対する懸念』、『体調と周囲との調整困難』に対する育児ストレスは低かった。母親にとって最も身近な存在は夫であり、夫の協力的態度や母親自身を支えてくれるという意識は母親の育児に対する満足感を高める<sup>15)16)</sup>。夫との関係や母親が育児をどのように捉えているかは育児を遂行する際のストレスサーとなり<sup>14)</sup>、親子関係にも影響を及ぼすが、今回の結果では比較的肯定的に捉えられていた。母親の年齢との関連では、30代の母親の方が20代・40代の母親よりも『育児の理想と現実に対する不安』に対する育児ストレスが低かった。しかし、『体調と周囲との調整困難』では、年齢の高い母親ほど高ストレス群が多かった。女性の第1子出生時の平均年齢は平成15年に28.6歳<sup>19)</sup>となり、周囲に同年代の母親が多くい

ることから育児の不安やストレスが少ないと考えられるが、一方で体力的問題も抱えていることがうかがえる。育児による母親の疲労では、援助者が少ないものほど慢性疲労があると言われており<sup>8)</sup>、夫や友人、保育所などの近隣サポートで協力して子どもを育てる体制作りが必要である。また、発達に関する育児ストレスは子どもの人数が多い母親に低かったが、育児経験があることから子どもの発達についての理解が深まるためと思われる。

一方、『育児環境の不備に対する不満』、『アイデンティティの喪失に対する脅威』、『子どもに対するコントロール不可能感』では、母親の育児ストレスが高かった。これは、夫の育児協力、育児に対する捉え方、体調をみながら調整を行うことは、家族や自分の身近な問題として比較的調整が可能であるが、子どもの遊ぶ場所、就労などの社会的環境、子どもが予測以上に思うようにならない場合など、調整困難な事柄に対しストレスが高くなることを意味している。子どもに対しては、いたずら、駄々をこねる、機嫌が悪くなるなど手に負えない状態になることにストレスを感じる母親が多かった。その要因として、現代の母親は育児体験が少なく、子どもにうまく対応できないことがあげられる。子どもの気質は母親の育児行動に影響を与え、母親が子どもを育てやすいと感じるかどうかが不安や育児満足に関係する<sup>13)</sup>。したがって、このような時に相談できるような、育児サークルの仲間作りや母子相談員などが必要と思われる。また、育児を支援する看護師や保育者は、母親の育児観や育児行動ばかりでなく、子どもの個性や気質などの特徴を合わせて考えながら母親をサポートしていくことが大切である。

今回の調査では、専業主婦の母親が7割を占めており、これはわが国における3歳児をもつ母親の就労率と同程度であった<sup>19)</sup>。母親の就労状況と関連があったのは、『アイデンティティの喪失に対する脅威』因子のみだったが、専業主婦の母親に対する育児支援の重要性が示唆された。育児環境に対しては、「今後、子育てにあてられる家計が不足しそうで不安だ」の項目で高ストレス群が多かった。夫婦が理想の数の子どもを持たない理由として「経済的な理由」

が挙げられている<sup>20)</sup>が、母親が専業主婦の場合、経済的問題が重要な関心事となっているためと思われる。『アイデンティティの喪失に対する脅威』では、特に「子育てに余裕ができる頃に就労できるかが不安だ」の項目で高ストレス群が多く、専業主婦の母親に育児ストレスが高かった。ゲルンハイムは、社会が産業化していくにつれ、女性が自分の人生を持ちたいという「個人化」のプロセスが進行し、子育てを女性の自立と自己決定に対する「本質的な障害」と捉える傾向と、一方で子どもとの情緒的つながりを求める「子ども志向の強まり」を指摘している<sup>21)</sup>。母親たちの多くは結婚・出産前の仕事や趣味を通じて自分の世界を持っており、「自分も子どもも大切にしたい」と思っている<sup>22)</sup>。そのため、特に専業主婦の母親では子どもと過ごす時間が長いことから、閉塞感や孤独感を感じることが多いのではないと思われる。現在では、専業主婦でも子どもを預かってくれるファミリー・サポート・センター事業や子育て支援センターなどの育児支援活動が取り組まれており、母親たちがこれらのサービスをうまく活用してリフレッシュができるように情報提供を行っていくことが大切である。エンゼルプランにより保育施設や託児環境は整備されてきたが、育児支援サービスに対する要望で依然として多いものは保育所・託児である<sup>23)</sup>。就労を希望する母親や専業主婦の母親のためにも、利用しやすい料金設定や利用条件、保育期間の拡大などサービス内容の検討が求められる。このような育児支援制度や、公園など遊び場等の育児環境について、さらにニーズに合った整備が望まれている。

今回の結果では、ほとんどの母親は育児を肯定的に捉えており、ストレスを感じるばかりでなく受容的に取り組んでいた。しかし、育児にストレスを感じる母親もみられるため、母親の悩みを聞いたり、相談にのったりすることで育児支援を行うことが重要である。

調査にあたり、協力していただきましたお母様方に感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 牧野カツコ. 乳幼児を持つ母親の生活と〈育児

- 不安). 家庭教育研究所紀要 1982; 3: 34-56.
- 2) 牧野カツコ. 働く母親と育児不安. 家庭教育研究所紀要 1983; 4: 67-76.
  - 3) 加藤道代, 津田千鶴. 育児初期の母親における養育意識・行動の縦断的研究. 小児保健研究 2001; 60(6): 780-786.
  - 4) 刀根洋子. 保育園児を持つ親のQOL—発達不安との関係—. 小児保健研究 2000; 59(4): 493-499.
  - 5) 興石 薫. 育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究—予期不安尺度と期待感尺度の作成—. 小児保健研究 2002; 61(4): 686-691.
  - 6) 岡本絹子, 中村裕美子, 山口三恵子, 他. 乳幼児を持つ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究. 小児保健研究 2002; 61(5): 692-700.
  - 7) 荒屋敷亮子, 兼松百合子, 荒木暁子, 他. 岩手県在住の乳幼児を持つ母親の育児ストレス及びソーシャルサポートに関する調査. 岩手県立大学看護学紀要 1999; 1: 65-76.
  - 8) 田中満由美, 倉岡千恵. 乳幼児を抱える専業主婦の疲労度に関する研究—ストレス・育児行動・ソーシャルサポートに焦点をあてて—. 母性衛生 2003; 44(2): 281-288.
  - 9) 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり, 他. 育児ストレスとその抑うつ重傷度との関連. 心理学研究 1994; 64: 409-416.
  - 10) 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 他. 育児不安に関する臨床的研究3—育児困難感のアセスメントの試み. 日本総合愛育研究所紀要 1997; 33: 35-56.
  - 11) Abidin RR. Parenting stress index manual 1st ed. Pediatric Psychology Press 1983.
  - 12) 奈良間美穂, 兼松百合子, 荒木暁子, 他. 日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 1999; 58(5): 610-616.
  - 13) 吉田弘道, 山中龍宏, 巷野悟郎, 他. 育児不安尺度の作成に関する研究 1歳半児の母親用試作モデルの検討. チャイルドヘルス 1999; 2(2): 139-143.
  - 14) 日下部典子, 坂野雄二. 育児に関わるストレスの構造に関する検討. ヒューマンサイエンスリサーチ 1997; 8: 27-39.
  - 15) 清水嘉子, 西田公昭. 育児ストレス構造の研究. 日本看護研究学会雑誌 2000; 23(5): 55-67.
  - 16) ラザルスRS, フォルクマンS. ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—. 本明 寛, 春木 豊, 織田正美監訳. 初版. 東京: 実務教育出版, 1991: 14-51.
  - 17) 加藤道代, 津田千鶴. 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスにおける関わる要因の検討. 小児保健研究 1998; 57(3): 433-440.
  - 18) 牧野カツコ. 〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討. 家庭教育研究所紀要 1989; 10: 23-31.
  - 19) 第4回世帯動態調査 国立社会保障・人口問題研究所, 2001年.
  - 20) 第11回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査), 国立社会保障・人口問題研究所, 1997年.
  - 21) E・ベック＝ゲルンスハイム. 出生率はなぜ下がったか ドイツの場合. 香川 壇訳. 初版 東京: 勁草書房, 1992: 251.
  - 22) 鈴木佐喜子. 現代の子育て・母子関係と保育. 初版 東京: ひとなる書房, 1999; 32-33, 42-43.
  - 23) 大沼珠美, 桑名佳代子, 桑名行雄, 他. 乳幼児をもつ母親および父親が体験する育児困難と育児支援サービスへの要望. 宮城大学看護学部紀要, 2003; 6(1): 83-96.